

『Ost=Asien』研究

—その2. 人名注解；外国人編—

Reserches on “Ost=Asien”
—No.2 A Biographical Annotation ; The Part of Foreigners—

泉 健
Ken IZUMI

2002年10月11日受理

序

昨年、ドイツ語の月刊雑誌『Ost=Asien』全139号の目次の翻訳を行った。続いてこれから2回にわたり、目次の中に出てくる人物の人名索引の作成と、それぞれの人物の簡単な紹介を行っていきたい。今回はまず外国人、次回は日本人の予定である。各人物の生没年の次には、その名前が登場した『Ost=Asien』の通巻号数をすべて記載した。従って昨年翻訳した目次と、この人名注解を併用することにより、ある人物が『Ost=Asien』の何年の何号にどのような論文、エッセイを書いたかということが、即座にわかるようになっている。またこの人名注解は、著者名として目次の中に現れた人物のみではなく、各論文、エッセイなどのタイトルの中に現れた人名も含んでいる。従って、例えば「シェークスピア」の項目を見れば、『Ost=Asien』に関係する範囲内で、日本におけるその受容の状況なども把握できるようになっている。

社会的、政治的、文化的背景を知る

この人名注解（外国人編・日本人編）を作成する最も大きな目的は、ここに記された各人物の生涯と業績を読むことを通して、『Ost=Asien』という雑誌が刊行された時代の社会的、政治的、文化的背景などを全体として浮かび上がらせることである。例えば、ヴィルヘルム2世、ビスマルク、ビューローなどの項目を通読することによって、後進資本主義国であったドイツが、露骨な「世界政策」によって帝国主義列強の中に強引に割り込んでいこうとした動きが見て取れるであろう。また張之洞、康有為、梁啓超、李鴻章、光緒帝、袁世凱などの項目を読み進めていくことによって、植民地化されつつあった清朝末期の中国において、上からの近代化を進めていこうとする動きと、それが挫折していく様子が理解され得るであろう。

また次回に予定の日本人編からは、ドイツよりもさらに遅れて資本主義化を押し進めていった日本が、一触即発の感のある帝国主義時代の世界状況の中に、まるで綱渡りをするかのような危

うい姿勢で食い込んでいこうとする様子が看取され得るであろう。『Ost=Asien』全12巻139号が刊行されたのは、1898-1910年（明治31-43）であったが、この雑誌の中の義和団事件（北清事変）や日英同盟や日露戦争などをめぐる様々な論文、報告には、当時のそのような社会状況が生き生きと映し出されている。

日本の洋学史研究の史料として

さて次に、『Ost=Asien』を史料として分析することによって得られる利点や、この雑誌を通して見えてくる様々な問題圏をいくつか挙げてみよう。まず『Ost=Asien』の中には、ベルツ,E、スクリバ,J、ロイブ,C、ライン,J、メッケル,Kなどの東京で勤務したお雇い外国人や、グラマツキー,A、ベルリン（名前不詳）など地方で働いたお雇い外国人（二人とも山口県で勤務）に関する記事が多く含まれており、これらは日本の洋学史研究、お雇い外国人の研究、日独文化交流史の研究などにとって貴重な史料となるであろう。特に、玉井喜作が当初医学を志していたことに関係するものと思われるが、医学関係の記事はかなり目立っている。例えば「枢密顧問官Dr.ベルツ教授のベルリンでの歓迎会」(No.37)、「ベルリンでのDr.スクリバ,J.教授」(No.45)、「ハンブルクでの第73回ドイツ自然科学者・医学者連盟の会議への日本人参加者」(No.44)、「カールスバーデでの第74回ドイツ自然科学者・医学者連盟の会議への日本人参加者」(No.56)、「ブダペストでの第16回国際医学学会の思い出」(No.135)、また日本人医師のベルリンでの消息を伝えるものとして、「木原岩太郎医学博士没」(No.32)、「ベルリンの日本人医師」(No.68)、「中井元吉医学博士没」(No.92)等々があり、これらは日本の医学史研究にとって得難い史料となるであろう。

ヨーロッパに留学した日本人の足跡を辿る

逆に『Ost=Asien』No.13（1899年（明治32）4月号）から連載されるようになった「ドイツにおける日本人」、同じくNo.33（1900年（明治33）12月号）からの「オーストリアにおける日本人」などは、当時ヨーロッパに留学した日本人の足跡を知る上で大変役に立つ。また『Ost=Asien』全号にある「Vermischtes雑報」の欄には、そうした日本人の動向を伝える記事が実にたくさん含まれており、これらは近代日本のヨーロッパ留学史研究のための貴重な史料である。例えばNo.38（1901年（明治34）5月号）の「ドイツにおける日本人」には、文豪幸田露伴、ピアノ奏者幸田延の妹である幸田幸（安藤幸、1899-1903年ベルリン留学）の職業・住所が、ベルリンの項に「音楽教師、ポツダム通り122cⅢ」(p.52)と記載されている。

滝廉太郎は1901年5月18日にベルリンに到着しているが、彼の名前が登場するのは次のNo.39（1901年6月号）からで、そこにはベルリンの項に「ノイエ・ヴィンターフェルト通り56a」(p.101)と住所のみが記されている。滝はベルリンには3週間しか滞在せず、6月7日にはライプツィヒに着いている。No.40号（1901年7月号）の住所録では、すでにライプツィヒの項に、彼のことが「音楽教師、フェルディナント・ローデ通り7番地」と記されている(p.150)。従来滝の伝記では、彼はベルリン到着の日にはホテル・ベレヴューに1泊し、すぐにノルレンドルフ通り1番地の下宿に移ったと書かれてきた（小長久子『滝廉太郎』、松本正著・大分県立先哲史料館編『瀧廉

太郎』など。次章の参考文献62、63参照)。すると、この『Ost=Asien』No.39の「ノイエ・ヴィンターフェルト通り56a」とは何であろうか。現在のベルリン市内の地図には、ノイエ・ヴィンターフェルト通りという名称は見つからない。「ノイエ」の付かないヴィンターフェルト通りは、ノルレンドルフ通りの一つ南の通りであり、いずれも、旧西ベルリンのクーダム通りを象徴するカイザー・ヴィルヘルム記念教会から東南に1.3Kmほど行ったあたりである。現在のヴィンターフェルト通りが、もし当時ノイエ・ヴィンターフェルト通りと呼ばれていたとすれば、この「ノイエ・ヴィンターフェルト通り56a」とは、当初引っ越すつもりで『Ost=Asien』の編集部(玉井喜作)にこの住所を連絡したが、付近に行ってみて気が変わり、一つ北のノルレンドルフ通りに決めた、ということなのだろうか。あるいは、わずか3週間の滞在にもかかわらず、1度下宿を変えたのであろうか。この点は現在不詳であり、いずれ確かめてみたい。いずれにせよ、幸田幸・滝廉太郎の2人は、周知のように明治以降の日本洋楽史を研究する上で欠くことのできない人物である。

またこの兩人のような留学のケースではないが、意外なものとして、ヨーロッパの伯爵家に嫁いだ初めての日本人クーデンホーフ光子の紹介が、すでに明治34年のNo.43(1901年10月号)にあるのも興味深い。

日本の伝統文化の紹介、ヨーロッパ文化の受容の紹介

さらにまた、『Ost=Asien』の中に見られる演劇・音楽関係の論文や報告記事は、ドイツ語圏を中心とするヨーロッパ地域に、日本の伝統文化を伝える大きな役割を果たしている。例えば、No.45(1901年(明治34)12月号)に掲載された北里闌(後に学習院大学教授)の「日本の演劇」は、能・狂言・歌舞伎・文楽を紹介しており、いまからちょうど100年前の記述であるが、当時この水準のものが日本人の手によってヨーロッパで紹介されていたことに驚く。一方No.135「日本でのシェークスピア」(1909年(明治42)10月号)のような記事もあり、この『Ost=Asien』という雑誌が、ヨーロッパに日本の伝統文化を紹介する役割を果たしていたと同時に、日本におけるヨーロッパ文化の受容の状況をヨーロッパに紹介する役割も果たしていたことがわかる。

ドイツ教養市民層と日本のエリート層との出会いの場

「明治以来、日本のエリート層は、法律や官僚制度から教育や学問や文化にいたるまで、ドイツ教養市民層の生み出した成果を広い範囲にわたって貪欲に吸収してきた」(野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』p.6, 次章の参考文献56参照)わけであるが、『Ost=Asien』は、功罪両面を有するこの両階層の、ベルリンにおける出会いの場であったとも言える。

他にも、もっといろいろな角度からの切り口が可能であるが、このような多面的な性格を持つこの雑誌を、様々な分野の専門家が、それぞれの問題意識に応じて利用し、その内容を分析していけば、そこには19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパと東アジアをめぐる諸側面が、まるで万華鏡を見るかのように展開していくであろう。なお、昨年翻訳した全目次の正誤表を本稿巻末に付けておいたので参照されたい。

I. 参考文献

『Ost=Asien』に登場してくる人名は、百科事典にも掲載されているような著名な人物もあれば、逆に同時代のドイツの人名事典にも載っていないような人物もあり、そのすべてを調査することはできなかった。以下の本稿は、現在までのところ判明した範囲内のものである。この章では、本稿で使用した参考文献と引用文献を内容別に5つに分類してp.37以下に挙げた。

まず1の事典類であるが、『Ost=Asien』の刊行時期(1898-1910年)の関係から、登場人物の生年は19世紀初頭のものもあり、あまり著名でない人物に関しては、特に古い人名事典1(これは大部なもので本体56巻と索引1巻からなる)、百科事典7、8などが役立った。1-12はボン大学の中央図書館(Universitäts- und Landesbibliothek Bonn)で利用したものであるが、特に7、8などの古い百科事典の各版が参考図書コーナーにあり、常時利用できる点は、この種の調査において大変便利であった。各版の「日本」や「中国」の項目の内容の推移は、そのままヨーロッパにおけるアジアの認識の変化に対応していた。4の『ドイツ伝記索引』は、この索引で探した各人物のデータが別置のマイクロフィッシュに収められており、索引自体にも膨大な数の人名が掲載されているため、今まで不詳であった人物のかなりの部分をこの4で調査することができた。また6は標記の通りの文献目録であるが、これも膨大な冊数の事典であり、他の事典と併用することによって各人物の著作の概要を知ることができ、大変便利なものであった。

2のベルリン独日協会(和独会)に関しては、他日稿を改めて詳しく論じる予定であるが、ここではこの項に挙げた文献のみ、簡単に紹介しておきたい。23は当該の『Ost=Asien』であるが、既述のように、各号の「Vermischtes雑報」にはベルリン独日協会(和独会)関連のことがたくさん記述されており、また独立した記事の中でベルリン独日協会(和独会)の行事などを紹介したものも多い(No.10:クリスマス、No.25:メンバーの記念写真、No.41:遠足など)。24-26は、ボン大学の日本学研究所Japanologisches Seminarの図書館で見ることができたものであるが、これらはベルリン独日協会(和独会)の機関誌であり、25は24の継続誌である。24の段階では、まだ出版社名も記入されておらず、印刷所のみが記された会報という感じの体裁であった。26は25の3巻12号に掲載されたものであり、1890-1910年(明治23-43)の20年間の同会の変遷が要領よくまとめられている。また26のpp.106-111には名誉会員、通常会員、ベルリン以外に在住の会員、団体会員に分類された会員名簿があり、それぞれの会員の肩書・住所が記されている。今までの調査で不詳であった人物の内、この会員名簿で素性が判明した人物も数名あった。

27はドイツ各地における独日協会の変遷を扱った書物である。全625ページの内、アンネッテ・ハック女史が1888-1945年(明治21-昭和20)の間の同協会の歴史を論じた部分は(pp.1-440)、日独関係史の史料としても貴重なものである。特に『Ost=Asien』の研究に際しては、1888-1912年(明治21-45)を扱った第1章が大変参考になる。28は、タイトル通り19世紀から20世紀にかけてのベルリンと東京の関係を扱った論文集であるが、単にこの両都市の関係に限らず、日独関係

史全体を視野に入れて、政治・経済・外交・美術・演劇・音楽などを種々の角度から論じた興味深い書物である。この文献に関する詳細に関しては、29の拙稿を参照されたい。30は、ベルリン東洋語学校講師として功績のあった辻高衡の伝記であり、彼は1902-1916年（明治35-大正5）の14年間にわたって同校講師を務めた。当時の同校の実情を知るのに良い文献である。また31は、辻高衡の前任者であった巖谷小波のベルリン留学時代の記録であり、当時のベルリンの日本人の生活、ドイツ人との交流の様子などが手に取るようにわかる。

既述のように、『Ost=Asien』にはベルツ,E、スクリバ,J、メッケル,Kなど、日本で勤務したドイツ人のことがかなりたくさん出てくるので、3のお雇い外国人の研究書は今回の研究に大いに役立った。また、明治時代に日本に滞在した外国人の回想記録や日記などは、40のように、当時の日本の音楽生活を伝える重要な史料になっているものや、47のように、日本の伝統芸能を外国人が紹介した文章を含むもの、また41のように、当時の日本のサウンドスケープを生き生きと伝えるものなど、音楽研究の上からも貴重な文献が多い。お雇い外国人のことを調査していく過程で浮かび上がってきたこれらの文献を、特に48で西成彦が行っているような方法論に基づいてさらに深く読み込んでいくことは、筆者の今後の課題である。

4は直接『Ost=Asien』の研究に関わるものではないが、既述のドイツ教養市民層とその影響を受けた日本の大学組織をめぐる問題、またそれに深く関係してくる学問論にかかわる文献などである。これらは、『Ost=Asien』に登場するドイツ教養市民層と日本のエリート層の様々な人物の知的背景を浮かび上がらせていると言える。

5の57は、日本とオーストリアの交流120年の歴史を振り返りながら、その中に現れた伯爵夫人クーデンホーフ光子、川上貞奴など、『Ost=Asien』にも登場する人物が紹介されている。同時代のベルリンにおける日独交流の様子を知る上で、その補完的役割を果たしている文献である。58は、『Ost=Asien』が刊行されていた19世紀末から20世紀初頭の時期に言論界をにぎわせた黄禍論の本質を、英米露仏独の膨大な史料から読み解いていき、帝国主義の時代状況や思想を解明していくもので、『Ost=Asien』の時代背景を知る上で貴重な文献である。59-61は現在の獨協学園関係の文献である。この学園のルーツである獨逸学協会学校は、第4代校長を務めた大村仁太郎などとの関連でベルリン独日協会（和独会）との関係が深く、その学園史は『Ost=Asien』を研究する上で役に立つ。61には『Ost=Asien』からの写真がいくつか掲載されている。62-63、64、65-67は、それぞれ滝廉太郎、巖谷小波、玉井喜作の伝記である。

1 人名事典、文献目録、歴史事典、海外交流史事典、百科事典など

- 1) Allgemeine Deutsche Biographie. (Neudruck der 1. Auflage von 1879) Berlin: Duncker & Humblot, 1968.
- 2) Neue Deutsche Biographie. Berlin: Duncker & Humblot, 1966.
- 3) Deutsche Biographische Enzyklopädie (DBE). München: K.G.Saur, 1997.

- 4) Deutscher Biographischer Index. München: K.G.Saur, 1998.
- 5) Wer ist's? : Zeitgenossenlexikon. Leipzig: H.A.Ludwig Degener, 1908.
- 6) Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums (GV) 1700-1910. München, New York, London, Paris: K.G.Saur, 1982
- 7) Brockhaus' Conversations=Lexikon.
13. Auflage: Leipzig: F.A.Brockhaus, 1882-1887.
14. Auflage: Leipzig, Berlin und Wien: F.A.Brockhaus, 1895-1897.
15. Auflage: Leipzig: F.A.Brockhaus, 1928-1935.
- 8) Meyers Grotes Konversations=Lexikon.
3. Auflage: Leipzig und Wien: Bibliographisches Institut, 1874-1884.
6. Auflage: Leipzig und Wien: Bibliographisches Institut, 1905-1913.
7. Auflage: Leipzig und Wien: Bibliographisches Institut, 1924-1933.
- 9) The Universal Jewish Encyclopedia. New York: Universal Jewish Encyclopedia Co, 1942.
- 10) Webster's Biographical Dictionary. U.S.A.: G.& C. Merriam Co, 1943.
- 11) Great Soviet Encyclopedia. (A Translation of The 3rd ed.:Bol'shaia Sovetskaia Entsiklopediia)
New York: Macmillan,INC.,1976.
- 12) Biographical Dictionary of Republican China. New York: Columbia University Press,1979.
- 13) 『編集復刻版 中国名人録』(Who's Who in China) 全5巻 (龍溪書舎、1973)
- 14) 山田辰雄編著『近代中国人名辞典』(霞山会、1995)
- 15) 『アジア歴史事典』全10巻 (平凡社、1960)
- 16) 富田仁編『海外交流史事典』(日外アソシエーツ、1989)
- 17) 武内博編著『来日西洋人名事典』(日外アソシエーツ、1995増補改訂普及版)
- 18) 岩波書店編集部編『岩波西洋人名辞典』(岩波書店、1981増補版)
- 19) 『大人名事典』(平凡社、1954)
- 20) 『世界大百科事典』(平凡社、1988)
- 21) 『大日本百科事典 ジャポニカ』(小学館、1972)
- 22) 『ブリタニカ国際大百科事典』(ティーズ・ブリタニカ、1975)

2 ベルリンの独日協会(和独会)に関する文献

- 23) Ost=Asien. Jg.1-12, 1898-1910. 各号の「Vermischtes雑報」と和独会関連記事
- 24) Deutsch-Japanische Gesellschaft (Wa-Doku-Kai) .Jg.1-2,1908-1909. Berlin: Druck von G.Ohme.
- 25) Mitteilungen der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai) .Jg.3-5,1910-1912. Berlin: Deutscher Verlag.
- 26) Anonym. "Die Entwicklung der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai) in der ersten

zwanzig Jahren ihres Bestehens” in: Mitteilungen der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai) .Jg.3 Nr.12. 1910, pp.93-105.

- 27) Haasch,Günther. hrsg., Die Deutsch-Japanischen Gesellschaften 1888-1996. Berlin: Wissenschaftsverlag Volker Spiess, 1996.
- 28) Brenn,Wolfgang., Goerke, Marie-Luise. hrsg., Berlin-Tôkyô: im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin : Springer Verlag, 1997.
- 29) 泉 健「書評：Brenn,Wolfgang., Goerke, Marie-Luise. hrsg., Berlin-Tôkyô: im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin: Springer Verlag, 1997.」『音楽学』46巻3号、2000年pp.171-173.
- 30) 上村直己「ベルリン東洋語学校講師・辻高衡」日本独学史学会編『日独文化交流史研究』1994年号、pp.39-53.
- 31) 巖谷小波『洋行土産』上下2巻（博文館、1903）

3 お雇い外国人研究及び来日外国人滞在記など

- 32) 梅溪昇他『お雇い外国人』全17巻（鹿島研究所出版会、1968-1971. 鹿島出版会、1975-1976）
- 33) 嶋田正他編『ザ・ヤトイ～お雇い外国人の総合的研究』（思文閣出版、1987）
- 34) バークス,A.W.編『近代化の推進者たち～留学生・お雇い外国人と明治』梅溪昇監訳（思文閣出版、1990）
- 35) 宮永孝『日独文化人物交流史～ドイツ語事始め』（三修社、1993）
- 36) ケルナー ,H.『シーボルト父子伝』竹内精一訳（創造社、1974）
- 37) クライナー ,J.編著『黄昏のトクガワ・ジャパン～シーボルト父子の見た日本』（日本放送出版協会、1998）
- 38) クライナー ,J.「もう一人のシーボルト～日本考古学・民族文化起源論の学史から」『思想』No.672, 1980年6月号, pp.68-83.
- 39) ジーボルト,A.G.G.von『ジーボルト最後の日本旅行』斎藤信訳（平凡社、1981）
- 40) ヘゼキール,T.編著『明治初期御雇医師夫妻の生活～シュルツェ夫人の手紙から』北村智明・小関恒雄共訳（玄同社、1987）
- 41) モース,E.S.『日本その日その日』石川欣一訳（平凡社、1970-71）
- 42) フィッシャー ,A.『明治日本印象記～オーストリア人の見た百年前の日本』金森誠也・安藤勉訳（講談社、2001）
- 43) フィッシャー ,F.『明治日本美術紀行～ドイツ人女性美術史家の日記』安藤勉訳（講談社、2002）
- 44) ミットフォード,A.B.『英国外交官の見た幕末維新～リーズデイル卿回想録』長岡祥三訳（講談社、1998. 初版：新人物往来社、1985）
- 45) ミットフォード,A.B.『ミットフォード日本日記～英国貴族の見た明治』長岡祥三訳（講談社、2001. 初版：新人物往来社、1986）

- 46) ハワード,E.『明治日本見聞録～英国家庭教師婦人の回想』島津久大訳（講談社、1999. 初版：新人物往来社、1978）
- 47) シドモア,E.R.『シドモア日本紀行～明治の人力車ツアー』外崎克久訳（講談社、2002）
- 48) 西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』（岩波書店、1998. 初版：岩波書店、1993）

4 ドイツ教養市民層論及び大学論・学問論など

- 49) 中山茂『帝国大学の誕生～国際比較の中での東大』（中央公論社、1978）
- 50) 潮木守一『京都帝国大学の挑戦』（講談社、1997. 初版：名古屋大学出版会、1984）
- 51) 上山安敏『世紀末ドイツの若者』（講談社、1994. 初版：三省堂、1986）
- 52) 潮木守一『ドイツの大学～文化史的考察』（講談社、1992. 初版：リクルート出版部、1986）
- 53) 潮木守一『キャンパスの生態誌～大学とは何だろう』（中央公論社、1886）
- 54) リンガー ,F.K.『読書人の没落～世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』西村稔訳（名古屋大学出版会、1991）
- 55) 佐々木力「比較学問エートス論」『思想』No.811, 1992年1月号, pp.4-50.
- 56) 野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』（講談社、1997）

5 その他

- 57) パンツァー ,P., クレイサ, J.『ウィーンの日本～欧州に根づく異文化の軌跡』佐久間穆訳（サイマル出版会、1990）
- 58) ゴルビツァー ,H.『黄禍論とは何か』瀬野文教訳（草思社、1999）
- 59) 堅田剛『独逸学協会と明治法制』（木鐸社、1999）
- 60) 七十五年史編集委員会編『独協学園七十五年史』（独協学園、1959）
- 61) 獨協学園百年史編纂委員会編『目で見ると獨協百年』（獨協学園、1983）
- 62) 小長久子『滝廉太郎』（吉川弘文館、1968）
- 63) 松本正著・大分県立先哲史料館編『瀧廉太郎』（大分県教育委員会、1995）
- 64) 巖谷大四『波の登音～巖谷小波伝』（文芸春秋社、1993）
- 65) 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』（新人物往来社、1989）
- 66) 大島幹雄『シベリア漂流～玉井喜作の生涯』（新潮社、1998）
- 67) 新村俊武「ドイツで健筆・国際ジャーナリスト 玉井喜作」産経新聞「日本人の足跡」取材班編『日本人の足跡三～世紀を越えた「絆」求めて』（産経新聞ニュースサービス、2002：pp.255-286）初出：『産経新聞』2001年10月16-19,21日

Ⅱ. 人名注解；外国人編

【凡例】

1. 各項目の姓名の日本語表記に関しては、西洋人の場合は姓のみ（例：ベルツ）とし、中国人と朝鮮（大韓）人の場合は姓名（例：張之洞、朴泳孝）を記した。また姓のみの記入で名前がイニシャルだけのもの（例：Baumann,F.）、また名前が未記入のもの（例：Berlin,）、姓名ともイニシャルのみのもの（例：G.B.）などは、可能な限り調査したが、不詳の場合はそのまま記すことにした。
2. 生没年不詳の場合は（ - ）とした。またどちらか不詳の場合は、(1889-)のように不詳の年数を空白のままにしておいた。
3. 生没年の後のNo.を付けた数字は、『Ost=Asien』の通巻号数であり、その号に当該人物名が論文等の筆署名として、あるいは論文等のタイトルの中に現れたことを示す。また目次には筆署名が明記されていない場合でも、調査の結果筆署名がわかった論文や（Rothbarth,W.、Siebold,A.G.G.vonの項参照）、その人物に関係する内容の論文である場合（WilhelmⅡの項参照）には、その号数と論文名を括弧に入れて示した。通巻号数は昨年度の拙稿、「『Ost=Asien』研究—その1. 全目次—」（和歌山大学教育学部紀要 人文科学、第52集 2002年）p.110を参照されたい。
4. 『Ost=Asien』からの引用に関する当該号数の表記の仕方は、原則として、巻号表示によらず、通巻号数（西暦年号・刊行月）で示すことにした。和暦を表示した方がわかりやすい場合は、それを西暦年号の次に入れた。例：『Ost=Asien』No.36（1901年3月号）、または『Ost=Asien』No.36（1901年（明治34）3月号）。その理由は、101号までを刊行した玉井喜作の没後2ヶ月の休刊があり、102号からは合併号が2つあるなど、刊行が少しイレギュラーになる年があるため、巻号表示よりも通巻号数で表示した方がわかりやすいと思われるためである。ただしこれは原則であり、文脈に応じて号数のみを記した場合や、巻号表示を入れた場合もある。
5. Iの参考文献と一部重なる部分もあるが、各項目を書くにあたって特に詳しく参考にした文献や、各人物に関する文献目録のデータなどに関しては、各項目の最後に「参考文献」として記入した。
6. 以下の人名注解においては、その事典的性格と各項目の独立性、また読みやすさを顧慮し、注は付けずに、引用文献は直接著者名と文献名を各項目の中に記入し、その出版社と出版年などの書誌的データは（I-28）のようにして参考文献の章を指示することにした。（I-28）はI章の28番の文献参照の意味である。

【B】

Bälz, Erwin Otto Eduard von ベルツ（1849-1913）No.37,93

ドイツの医学者。1876年（明治9）に東京医学校（東京大学医学部の前身）に招かれ、以後26年間にわたって在任し、1905年（明治38）に帰国。シュトゥットガルト近郊のビーティヒハイムに生まれ、チュービンゲン大学とライプツィヒ大学で医学を修め、1876年にライプツィヒ大学のヴンダーリヒ教授のもとで講師となる。来日後は内科学を中心として、同じくお雇い外国人であった外科のスクリバ、J.とともに、日本の医学教育に大きな役割を果たした。特にベルツは、単なる医療技術の伝達のみではなく、19世紀ドイツの大学を特徴づける科学研究の方法論も伝え、当時日本に多かった脚気や寄生虫病などの研究を開始した。また「日本人の身体的特徴について」などの人類学的研究も行っている。1902年（明治35）東京大学退職後、宮内庁御用掛・侍医局顧問を勤める。夫人は日本人の花であり、息子のトク・ベルツ編の日記など、ベルツに関する記録、

Empfang des Geh. Hofrath Prof. Dr. Baelz in Berlin.

(10. Februar 1901.)



Okamoto Uchida Otsuka
Kashiwamura Azuma Totsuka Miyamoto Mochizuki Hirai Sawada Toriyama Tashiro
Saito Inouye Kitashima Baelz Yamagami Onishi Giōtoku Hondo

研究は多い。上の写真は、『Ost=Asien』No.37（1901年4月号）p.7に掲載されたものであり、前列左から4人目がベルツである。これはベルツ3回目の帰国の折のものであり（石橋長英・小川鼎三『お雇い外国人：9 医学』鹿島出版会、1969、pp.126-129）、『Ost=Asien』No.36（1901年3月号）p.542の「雑報」によれば、東大でのかつての教え子とともにベルリンで撮った記念写真である。[参考文献]トク・ベルツ編『ベルツの日記』上下、菅沼竜太郎訳（岩波書店、1939）、鹿島卯女『ベルツ花』（鹿島研究所出版会、1972）、眞寿美・シュミット＝村木『花・ベルツへの旅』（講談

社、1993)、ゲルハルト・クレプス「エルヴィン・フォン・ベルツ (1849-1913) ~その一生と業績」、ヨーゼフ・クライナー「ベルツ博士の日本研究とヨーロッパの日本観」ヨーゼフ・クライナー他監修・ドイツ-日本研究所編『ベルツ・コレクション：帰ってきた幕末・明治の絵画~ドイツ・リンデン博物館所蔵』(朝日新聞社、1993) pp. 8-12, pp.121-123、安井広『ベルツの生涯—近代医学導入の父—』(思文閣出版、1995)

Baumann, F. バウマン () No.133-139

新聞・雑誌の編集者、文筆家。ドイツ人。ベルリン独日協会(和独会)会員。彫刻家イサム・ノグチの父である野口米次郎の作品『アメリカのモルゲングランツ嬢』の独訳を、『Ost=Asien』No.133-139に連載している。原作は、筆名「朝顔嬢」で『日本少女の米国日記』として、1902年(明治35)9月にアメリカで出版されたものである(Miss Morning Glory. “American Diary of a Japanese Girl”)。その7年後にベルリンで、この作品がAsagao San in Amerika. “Tagebuch-Aufzeichnungen einer jungen Japanerin”として、1909年(明治42)7月号の『Ost=Asien』No.132の書評欄に取り上げられた(pp.512-513)。そしてバウマンの独訳は、その次のNo.133からNo.139まで6回に渡って掲載された。[参考文献]ドウス昌代『イサム・ノグチ~宿命の越境者』上下(講談社、2000年)、ドーレ・アシュトン『評伝 イサム・ノグチ』笹谷純雄訳(白水社、1997年)

Bergmann, Ernst Gustav Benjamin von ベルクマン (1836-1907) No.106

ドイツの外科医。リトアニアのリガで生まれ1860年ドルパート大学卒業。その後ウィーン、ベルリンなどの大学で学び、1882年ベルリン大学外科教授。その間普墺戦争、普仏戦争等に軍医として従軍し、その経験から軍陣外科手術の改善に尽くす。特に化学的滅菌法を研究し、近代外科学の確立に貢献した。19世紀末のドイツにおいて外科の第一人者と言われた。

Berlin, ベルリン (-1872 ?) No.51

お雇い外国人として、明治の初めに長州藩(山口県)でドイツ語を教えたドイツ人教師。『Ost=Asien』No.51(1902年6月号)に掲載された記事、「ベルリン博士の近親者が探し求められている」(p.112)には次のように記されている。毛利侯は1871年(明治4)に日本最初のドイツ語学校を設立し、ベルリン(姓のみ記されて名前は不詳)は1872年まで勤務した。その後任として、ベルリン独日協会(和独会)のメンバーであるヒラー,R.(p.46ページの写真の前列左から4人目の人物)が、1872-75年の期間を勤めた。ベルリンは日本での任務終了後、日本人の妻と子供とともに船で三田尻(山口県防府市)から神戸に向かっていたが、ある夜彼は忽然と姿を消した。海に落下したのか自ら飛び込んだのかもわからず、死体も見つからなかった。それから30年が経過し、子供(Ichisuke Yoneyama)は現在東京の三井製作所に勤務しており、ドイツにいると思われる父の親戚を捜している。ヒラー,R.によれば、30年前にベルリンから聞いた話では、彼の母はブレスラウにあり、彼には兄弟姉妹もいたらしいが、現在は不詳。この雑誌の読者で何かこの件に関する情報をお持ちの方は、東京の子供に直接連絡を請う(芝区金杉浜町54番地)。このような内容である。

ベルリンの死の原因はともかくとして、この記事は日本におけるドイツ語教育の歴史に関して興味深い話題を提供している。この中で「1871年（明治4）に日本最初のドイツ語学校」とあるが、これは事実ではない。宮永孝『日独文化人物交流史～ドイツ語学事始め』（I-35）によれば、1867年（慶応3）にはプロシアの代理公使ブランドが、幕府にドイツ語学校の設立やプロシアへの留学生派遣を要請している。ただしこの学校は設立されず幻に終わった（同書pp.179-190）。しかし1869年（明治2）には、大学南校（東京大学の前身）で英・仏語と並んでドイツ語が教えられるようになり（同書p.213）、1870年には京都河原町に洋学の教場「欧学舎」が開設され、ルードルフ・レーマン（1869-1914年在日）がドイツ語教師に任命されている（同書p.198）。また1871年、紀州藩は華岡青州のもとで外科術を学んだ池田良輔にドイツ語の辞書の翻訳を命じている（同書p.196）。長州藩に、1871年ドイツ語学校が設立されたのは、このような時代の流れの中でのことであった。なお富田仁編『海外交流史事典』（I-16）p.347によれば、ベルリンは医学も教えたということである。

Bismark, Otto Eduard Leopold Fuerst von ビスマルク（1815-1898）No.6

ドイツの政治家。プロイセンのユンカー出身。ベルリン大学とゲッティンゲン大学で法律を学び、プロイセンの官吏を経て政治家となる。1848年の3月革命においては反革命主義者として行動したが、その後プロイセン公使、ロシア大使、フランス大使などを歴任する過程で、次第にヨーロッパ情勢に目を開いていった。そしてプロイセン国家の拡大・強化のために、オーストリアを排除した形でのドイツ統一の必要性を自覚していき、1862年にはプロイセン首相となる。その後いわゆる〈鉄血政策〉にもとづき、普墺戦争（1866）と普仏戦争（1870-1871）に勝利してドイツ統一を完成し（1871）、ドイツ帝国初代の宰相（1871-1890）となった。

Blumentritt, Ferdinand ブルーメントリット（1853-1913）No.6,8,12,24,52

プラハ生まれの民族学者、地図制作者、フィリピン研究家。

Boku-Yeiko 朴泳孝（1861-1939）No.31

朝鮮、李朝末期の政治家。朝鮮の近代的改革をめざした政治家集団である開化派の1人。1884年の甲申政変、1894-95年の甲午改革に関与するが、いずれにも失敗し日本に亡命。日韓併合（1910）後は日本から侯爵の爵位を受け、中樞院顧問官となる。

Brandenstein, Orga von ブランデンシュタイン（1883-1966）No.90

大シーボルト（Siebold, P. F. B. von、本稿pp.63-64参照）の次女マティルデの長女。[参考文献]「Ph. F. von Sieboldの系譜図」『シーボルト記念館 鳴滝紀要』創刊号、1991

Brandt, Max August Scipio von ブラント（1835-1920）No.48

ドイツの外交官。当初プロシアの軍人、後に外交官となる。1860年（天延1）プロイセンの特命全権公使オイレンブルク、F.A.の使節団として来日し、1862年プロイセンの駐日常任代表者、1863年初代駐日プロイセン領事として横浜に赴任。1867年プロイセン代理公使、1868年（明治1）北ドイツ連邦総領事、1872年駐日ドイツ全権公使となる。1875-1893年（明治8-28）に中国公使を

勤める間、中国-ドイツ間の貿易の仲介も行う。中国-ドイツ間の郵船航路の開設やドイツ-アジア銀行の創設は彼の発議による。[参考文献]バウマン, A. H.「日本における初滞在プロシア領事〜マックス・アウグスト・スツィーピオ・フォン・ブランツ」日本独学史学会編『日独文化交流史研究』1995年, pp.55-70.

Brunn, Paul ブルン () No.12-17,20-29,31,33-34,50-51,53,55,57,60,68-69,73,93-95,118-119,121

法学博士。ドイツ人。1898年学位取得。1901年判事試験に合格後ベルリン社会保険局所長補佐、1907年からは同理事の一員となる。ベルリン東洋語学校でも学び、1898-1907年までベルリン独日協会(和独会)の監事を勤める。ベルリン東洋語学校(Seminar für Orientalische Sprachen zu Berlin)に関しては、上村直己「ベルリン東洋語学校講師・辻高衡」(I-30)に詳しいが、それによれば、これは1887年(明治20)10月27日に、当時の首相ビスマルクによってベルリン大学の付属高等教育機関として設立されたもので、日本語科の初代主任教授はランゲLange, R. (本稿pp.50-51「フェルスター, P.E.」の項目参照)であった。ここで学ぶ学生は、将来外交官を目指す法学部の学生や医学部の学生が多かったが、稀には歴史学や言語学などを専攻する学生も聴講していたということである(上村直己「同」p.39, p.44)。パウル・ブルンは、経歴から見ると法学部の学生であったと思われる。

彼は、玉井喜作が亡くなるまではほぼ継続的に『Ost=Asien』に寄稿し、その内容も専門の法律問題のみではなく、歴史(『Ost=Asien』No.50-51,53,55,57)や統計学(同No.34,68,93-95)や美術(同No.60)や日本赤十字社に関すること(同No.73)など幅広い分野にわたっている。その論文・翻訳などの数は、アレクサンダー・シーボルト(本稿pp.62-63参照)について多い。

玉井喜作が亡くなった時、1906年(明治39)9月28日にベルリンの玉井宅において行われた葬儀においては、ベルリン独日協会(和独会)の代表としてパウル・ブルンが、また日本人からはドイツ大使館付武官明石元二郎大佐が、「たくさんのお花で飾られた故人の柩の前で、それぞれ敬意に満ちた追悼の辞を述べた」(『Ost=Asien』No.102,「玉井喜作没」p.232)。また『Ost=Asien』の10周年記念号に当たるNo.121においては、ブルンはこの雑誌の成立の経緯と、10年間の概要を報告している。そこでは、この雑誌が単に日独間の貿易を促進するという「主要な使命」のみではなく、日本の国内政治・外交・戦争(北清事変、日露戦争)・歴史・文学・芸術などの情報をヨーロッパの読者に提供するという点に関しても、大変大きな役割を果たしたことを指摘している(「この月刊誌の10年間の存続に；パウル・ブルン博士」p.17)。

『Ost=Asien』が刊行されていた12年間(1898-1910年)に、大シーボルトの長男であるシーボルト, A. は52歳から64歳であった。彼が『Ost=Asien』に寄稿した数多くの論文の内容から判断すれば、彼は同誌の論説委員的役割を果たしていたように思われる。それに対して、同時期に20代後半から30代であったと思われる若いブルンは、以上のような経緯を考慮すれば、単に同誌に寄稿するだけではなく、もっと玉井喜作の身近で毎月の『Ost=Asien』の刊行にも関与していたのでは

ないだろうか。1902年（明治35）には玉井喜作の妻エツと次女韶子、三女文子もベルリンに到着し、やがて三女喜代子、長男太郎も生まれている。おそらくブルンはこれらの家族とも親しく時を過ごしたことであろう。下の和独会会員の記念写真は、『Ost=Asien』No.25（1900年4月号）



p. 3に掲載されたものであり、前列右から2人目がパウル・ブルン、その右隣が玉井喜作である。

なお玉井喜作の葬儀の折に弔辞を述べた明石元二郎とは、周知のように日露戦争の折、後方攪乱のためにヨーロッパで対ロシア諜報・謀略工作を行なった人物である。その活動は、ロマノフ王朝打倒を目指しロシア革命の原動力となった諸派のグループに、かなりの影響を与えたと言われている。明石の行動はすでに、南條範夫『参謀本部の密使～かくてロシアは破れたり』（光文社、1966）、小森徳次『明石元二郎』上下（原書房、1968）、小山勝清『明石大佐とロシア革命』（原書房、1984）、水木楊『動乱はわが掌中にあり～情報将校明石元二郎の日露戦争』（新潮社、1991）、デー・

ベー・パプロフ、エス・アー・ペトロフ『日露戦争の秘密～ロシア側資料で明るみに出た諜報戦の内幕』左近毅訳（成文社、1994）、稲葉千晴『明石工作～謀略の日露戦争』（丸善株式会社、1995）などで詳しく紹介されているが、玉井喜作のことはそれらの中には出てこない。

玉井喜作と明石元二郎との関係が日本で初めて一般に紹介されたのは、意外に古く、『サンデー毎日』1942年（昭和17）10月18日号の記事、小谷茂夫「日獨親善の人柱～“私設公使”玉井喜作を憶う」（pp.46-48）においてである。これは同記者が、当時山口県下関市に四女喜代子と住んでいた玉井喜作の妻エツを訪問し、エツの回想と当家に残っていた諸資料をもとにして、玉井喜作の生涯を記したものである。また当時関西在住であった玉井喜作の姪八杉サダ、甥小川政雄の追想も補完的資料として使用されている。この中で明石元二郎と玉井喜作の関係が次のように描かれている。（ ）内は筆者挿入。

明石元二郎大將が露国の国情調査にドイツ入りするや、彼（玉井喜作）は自ら雇っているドイツ娘の書記官の母親やその友人を使って貴重なる情報を集めこれを明石大將に提供していたが、当時の彼の活躍ぶりは「玉井はパンが嫌いで生活が楽になってからは小さい鍋で米を炊いて食べていましたが、日露戦争がはじまり明石さんが来られてからはいつ帰ったのか、いつ出て行ったのか判りませんでした。ただ時々鍋に米を炊いたあとがあるのを見て昨夜はお帰りだったのだと知るのみでした」と語る婦人の言葉の如く、神出鬼没を極め相当な成果をあげた。

この両者の関係を、文学的創作を交えながらではあるが、初めて詳しく紹介したのは、その記事から約半世紀後に出版された湯郷将和『キサク・タマイの冒険』（I-65：特にp.202～）であった。その後大島幹雄『シベリア漂流～玉井喜作の生涯』（I-66）や、新村俊武「ドイツで健筆・国際ジャーナリスト 玉井喜作」（I-67）などの玉井の伝記においても、両者の関係が指摘されるようになった。

しかし明石の仕事の性格上、証拠となるものは極力焼却していったためであろうが、両者を繋ぐ具体的な史料は、筆者の知りうる限り上述の2つしか残されていない。すなわち、一つは1906年（明治39）11月号の『Ost=Asien』No.102（9巻6号）の玉井喜作追悼記事であり、もう一つは1942年（昭和17）10月18日号の『サンデー毎日』の記事である。前者には筆者名が記されていないが、これは、玉井亡き後『Ost=Asien』を受け継いで刊行していった老川茂信が書いたものとみて間違いはないであろう。

いずれにせよ玉井喜作と明石元二郎との関係は、ベルリンにおける明石工作の解明につながるというだけではなく、ひいては日露戦争史、ロシア革命史、社会主義運動史とも関連してくる非常に興味深いエピソードである。

Bülow, Bernhard Heinrich Furst von ビューロー（1849-1929）No.49

ドイツの外交官、政治家。1873年外交界入りし、ウィーン、パリ、ペテルブルクなどに勤務した後、1893年ローマ駐在大使、1897年外相を経て、1900年にドイツ宰相、プロイセン首相となる。19世紀末に、ドイツはイギリスに次ぐ大工業国となり、当時は海外に植民地、市場を求めて強力な帝国主義的政策を行っていた時期であったが、ビュローは1900-1909年の間ウィルヘルムⅡ世（在位1888-1918）のもとで、東アジア・中東・アフリカにおける「世界政策」（ドイツ中心の積極的膨張政策）を展開していった。しかし外交面において、海相ティルピッツのイギリスを目標にした大規模な海軍拡張計画を十分に阻止できず、1905年のモロッコ事件ではフランスに対して自己の主張を貫徹できず、また1909年のボスニア併合問題ではロシアの反発を招くなどして、次第にドイツを孤立化させていった。さらに内政問題では財政改革に失敗し、1909年に辞任した。なお東アジア関係では、膠州湾の租借、義和団事件（北清事変）の際の当事者であった。

【C】

Chang-Chi-Tung (Tschang-Tchi-Tung) 張之洞 (1837-1909) No.21,25,135

中国、清朝末期の官僚、政治家。1884年広東・広西を治める両広総督に就任して以降、前後18年間にわたって湖広（湖北・湖南）、両江（江蘇・安徽・江西）の総督を勤め、その間洋務運動（西洋の科学技術を導入して殖産興業、富国強兵を行なう）に尽力した。しかし洋務運動は上からの改革にすぎず、西洋の民主思想や議会制度には拒否反応を示し、その改革は中体西洋（中国の伝統を体とし、西洋を用とする）という外面的な西洋技術の模倣にとどまった。従って康有為一派の変法運動（日本の明治維新を手本とする中国人自らの手による近代化運動）に対しては、一応理解を示しながらも、その行きすぎを咎め、結局はそれを弾圧することになった。上の肖像は、



『Ost=Asien』No.135（1909年10月号）p.102に掲載されたものである。

Cohn, William コーン (1880-1961) No.120

ドイツの東洋美術史家。ベルリンで生まれ、ベルリン、エアランゲン、パリの各大学で美術史を学んだ後、博士学位取得のための研究との関連でアメリカ、インド、タイ、ビルマ、ジャワ島、日本などを旅行。ベルリン独日協会（和独会）会員。1915-1935年には雑誌『Ostasiatische Kunst 東亜美術』の共同編集者を勤めた。1929年にベルリン国立美術館理事となるが、1933年ナチスの独裁開始とともに同職を解雇される。その後なお5年間ベルリンの極東芸術協会の事務局員を勤めたが、1938年にイギリスに亡命し、それからはオックスフォード大学で教鞭を執った。1949-56年の間は同大学のアジア芸術博物館の館長を勤め、また1948年以降は雑誌『Oriental Art 東洋美術』の共同編集者でもあった。『中国の絵画』（1948）などの著作がある。1961年オックスフォードで死去。

Conrady, August コンラディー (1864-1925) No.131-134

ドイツの中国学者。ヴィースバーデンで生まれ、ヴュルツブルク大学で古典文献学とインド文献学を学び、1891年に学位を取得。1896年ライプツィヒ大学助教授、1920年同大学教授。北京滞在をきっかけとして民俗学的な中国研究に関心が向かい、3-4世紀頃の西域近辺の駐屯都市の生活洋式や、初期中国の住居を研究した。ザクセン科学アカデミー会員。1925年ライプツィヒで死去。

Coudenhove-Kalergi, Heinrich クーデンホーフ-カレルギー (1859-1906) No.43

Familie des Grafen Coudenhove in Ronsperg, Böhmen.



Elisabeth. Gérolf. Richard. Johann. Olga.



Graf Dr. Heinrich Coudenhove.



Gräfin Mitsu Coudenhove, geb. Aoyama
aus Tokyo.

オーストリア・ハンガリー帝国の駐日代理公使。古い貴族の家系に生まれ、1892年（明治25）代理公使として東京に赴任し、外交官として勤務しつつ東洋文化の研究にも従事した。また芸術分野にも造詣が深く、日本で最初のオペラ上演が1894年（明治27）11月24日に東京音楽学校で行われた際に（グノーの「ファウスト」第一幕書斎の場の抄演）、メフィストフェレスを演じた。1896年（明治29）に帰国後は外交官を引退し、広大な領地の財産管理をしつつ、哲学、宗教などを研究した。1900年にはプラハのカレル大学で、反ユダヤ主義の本質についての学術論文によって学位を得るが、6年後に46歳で死去。

日本滞在中の1892年には、日本人青山光子と結婚。二人の間にできた7人の子供たちのうち、次男のリヒャルトはパン（汎）ヨーロッパ運動の提唱者となる。光子は日本には一度も帰国せず、1941年（昭和16）に67歳で死去。ウィーンに葬られる。光子没後60年を経た2002年には、「黒髪の伯爵夫人：クーデンホーフ光子展」が東京、大阪などで開かれた。

前頁の3枚の写真は、『Ost=Asien』No.43（1901年（明治34）10月号）の記事「ボヘミアのロンスペルクにおけるクーデンホーフ,H.伯爵の家族」（pp.296-297）とともに掲載されたものである。上の写真には、この年1月に生まれた三女イダを除いて子供全員が写っている。また記事の方では、クーデンホーフ伯爵の経歴紹介とともに、当時横浜で刊行されていた『The Japan Weekly Mail』に掲載された記事を引用して、1892年4月16日の二人の結婚式の様子が紹介されている。当時日本で『Ost=Asien』を定期購読していたのは、少数のエリート階層の日本人であったと思われるが、この記事は、青山光子がヨーロッパに渡って5年後の様子を確実に日本に伝えたことになる。

【D】

Domansky, Walter ドマンスキー（1860-1936）No.116

牧師。ダンツィヒ（現ポーランドのグダンスク）で生まれ、ライプツィヒ大学とケーニヒスベルク大学で神学を学ぶ。1885-90年の間聖職に就くが、絶え間ない神経疾患のため故郷に戻り、牧師として暮らす。同時に著述家として、キリスト教的説話や、たくさんの論説記事を書いた。1936年ダンツィヒで死去。

【F】

Förster, Paul E. フェルスター（ - ）No.38-39

巖谷小波（本稿グラマツキー ,A.の項pp.51-53参照）がベルリン東洋語学校講師をしていた時に、同校に在籍した学生。次の頁の写真は、『Ost=Asien』No.42（1901年9月号）p.247に掲載されたものであり、右から2人目の人物がフェルスターで、この写真の下には次のような説明が付いている。「ランゲ,R.教授（この写真の左端の人物）によると、ベルリン東洋語学校創設以来、パウル・フェルスター君ほど短時間で日本語を身につけた学生はいなかった」。ランゲ, R. (Lange, Rudolph 1850-1933) はドイツ人で、1874-1881年（明治7-14）の間東京大学のお雇い外国人教師として、ドイツ語、ラテン語、数学を教えた。後にベルリン東洋語学校で、ドイツでは初めての日本語の授業を開始し、すぐれた日本語の教科書を著した。なおこの写真の右から3人目が巖谷小波であ

Die Japanische Klasse des Orientalischen Seminars in Berlin.

(Prof. Lange und Lektor S. Iwaya mit 4 Abiturienten.)



Erich Kloss. Paul Förster.
Prof. Lange. Rud. Buttmann. Lektor S. Iwaya. Hans Hiller.

る。またフェルスターは、本稿p.46の写真の前列左から2人目にも写っている。

Frankfurter, Oacar フランクフルター (-) No.33

東洋学者ミュラー, F.M. (本稿pp.57-58参照) の教え子、友人。1884年頃からタイ国政府の外務省と法務省に勤務。『Ost=Asien』 No.33に師のミュラー, F.M.の追悼記事を書いている。

Funke, Max フンケ (-) No.110, 134,135,137

【G】

Gappo, F.T. ガッポ (-) No.61-63,65

G.B. (-) No.98

Gotthard, August ゴットハルト (-) No.47,61

Gramatzky, August グラマツキー (1862-1942) No.11,15,20-22,24-31,39,60,62,93,98-99,101-102

日本の旧制高校でドイツ語を教えたドイツ人。1887-1890年ベルリン東洋語学校在籍。1892年にハレ大学で、おそらくドイツ人としては初めて日本学関係のテーマで学位を取得。その後国会の速記者として過ごした後、1898年(明治31)に来日。旧制山口高等学校のドイツ語教授となり、1906年(明治39)3月に帰国した。長くベルリン独日協会(和独会)の会員であり、何度も監事を勤めたが、帰国後の様子は不詳。

グラマツキーの日本滞在は、玉井喜作がちょうど『Ost=Asien』をベルリンで創刊した1898年に始まり、その帰国は玉井が亡くなった1906年である。彼はシーボルト, A.、ブルン, P.について、『Ost=Asien』に恒常的に寄稿している。しかし玉井没後老川茂信が編集長となってからは、102

号の翻訳(101号の続編)以外は、何も寄稿していない。下の写真は、『Ost=Asien』No.43(1901年(明治34)10月)p.305に掲載されたものであり、山口高等学校の学生とともに写したものである。右端がグラマツキー。

彼は『Ost=Asien』No.98-99とNo.101-102において、巖谷小波(季雄・漣山人)の小説や戯曲を独訳しており、また巖谷がベルリン東洋語学校の講師の任期(1900-1902年、明治33-35)を終えて帰国後出版した『洋行土産』上下(I-31)の独訳も担当している。後者はSazanami Sanjin(Iwaya). “Briefe eines Japaners aus Deutschland”, Übersetzung von Gramatzky, A., Herausgegeben von Haas, H., Bremen: 1904, Max Nösslerという書籍であり、『ある日本人のドイツからの手紙』というタイトルで、ブレーメンで日本領事をしていたネスラー, M.の出版社から刊行された。ただし全訳ではなく、上巻の「伯林百談」の中から50の話を選んだ抄訳である。

この『洋行土産』上下2巻は、20世紀初頭のベルリンやライプツィヒにおけるドイツの音楽生活、



当地における日本人の演奏などを知る上で貴重な資料である。川上音二郎・貞奴一座のベルリン公演(上pp.263-265)、幸田露伴の妹幸田幸のベルリンでの箏曲「吾妻獅子」の演奏(上pp.291-292)、ライプツィヒでの音楽学者フーゴ・リーマン教授の講演と、幸田幸の箏曲「六段」「松竹梅」などの演奏(上pp.294-297)、ベルリンにおける烏森芸者一行の公演(下pp.81-85)などのことが記されている。

ところで『洋行土産』のグラマツキーによる独訳は、初め “Die Wahrhaeit 真理 ~ Erste Deutsche

Zeitschrift in Japan”という雑誌に掲載された。「真理～日本で初めてのドイツ語による雑誌」と銘打ったこの雑誌の編集者は、プロテスタントの牧師ハンス・ハース博士 (Dr. Hans Haas) である。創刊号は1900年 (明治33) 3月、真理社 (東京小石川区上富坂町39番地) から出版されている。そしてグラマツキーの独訳は5巻7-8合併号、1904年7-8月号pp. 1-77に掲載された。従って、掲載後すぐに上記のネスラー、M.出版社から刊行されたことになる。

ハース編のこの雑誌は日本の大学図書館などには見あたらず、筆者はボン大学の中央図書館で、その1-5巻に接することができた。この中には、20世紀初頭にドイツ人が日本の音楽をどのように受容していたか、あるいはアジア地域でのドイツ音楽の演奏会の様子などに関して、興味深い論文・報告がいくつかある。すなわち、Haas, H. 「Die japanische Nationalhymne」 (日本国歌) (2巻1号、1901年1月号、pp. 3-7)、「新教神学校入学案内」 (2巻3号、1901年3月号、巻末・日本語。ここには授業科目名としてオルガンと唱歌が記されており、これは明治中期の日本における西洋音楽の受容の史料となるであろう)、「Deutsche Musik in Korea」 (朝鮮 (大韓) におけるドイツ音楽) (2巻11号、1901年11月号、p.236)、Haas, H. 「Die No-Spiele in Japan」 (日本の能楽) (5巻1号、1904年1月号、pp.14-17)、「Hichikiochi (七騎落) “Die Flucht der sieben Ritter” ~Ein Japanisches No-Drama」 (「七騎落」日本の能) (5巻2号、1904年2月号、pp.32-35) などである。

【H】

Heffter, Werner ヘフター (1871-) No.104-113

ドイツの化学者、エンジニア。ベルリンで生まれ、1876-81年はザヴィエルチェ Zawiercie (現ポーランドのクラクフ近郊) で過ごし、1881年から再びベルリンで暮らす。1895年にヴュルツブルク大学で学位取得。1895年以降いくつかの企業に勤め、1906年にデュイスブルクのヴェルナー・ヘフター商会技術部門取締役になる。

Prinz Heinrich ハインリヒ公子 (1862-1929) No.18

ドイツ皇帝ヴィルヘルムⅡ世 (在位1888-1918、本稿p.70参照) の弟。1879年 (明治12) に来日し、東京に2週間滞在した。上野の精養軒で行われた晩餐会の様子は、『明治初期御雇医師夫妻の生活～シュルツェ夫人の手紙から』 (Ⅰ-40) pp.163-171に詳しい。この晩餐会の折には、同じ年の春に来日し海軍軍楽隊お雇い教師をしていたエッケルト, F.v. が、行進曲 “Gruß der Deutschen” をハインリヒに献呈している (同書p.167)。なお同書は、お雇い外国人医師シュルツェ, W. (1840-1924) の妻として1878-1881年 (明治11-14) に来日したエンマ・シュルツェが、その間の生活をドイツの両親に宛てて綴った手紙で構成されている。エンマ婦人はピアノを弾き、自宅でもお雇い外国人を中心とした気軽なサロン・コンサートをたびたび行った。例えば1878年11月30日には、夫とのピアノ連弾によるベートーヴェンの第五交響曲の全曲演奏も行っている (同書p.120)。他にも歌舞伎見物の折の印象や (同書pp.112-114)、のちに女子学習院の音楽教師となったマツノ・クララ (旧姓 Clara Tietelmann 1853-1941) との出会いのことなど (同書p.118) も記されている。

このように同書は、明治10年代前半におけるお雇い外国人のサークルを中心とした東京の音楽生活の一端を伝え、また当時、ドイツ人が日本音楽をどのように受容していたかということや、日本における明治初期の西洋音楽の演奏の様子なども伝えており、音楽史の貴重な史料にもなっている。

Hildebrandt, Eduard ヒルデブランドト (1818-1868) No.130

画家。芸術アカデミー会員。ダンツィヒ（現ポーランドのグダンスク）で生まれ、1837年にベルリンに行くが、美術学校には入学できず、海景画家として知られたクラウゼ、W.のもとで学んだ。1840年にはスカンジナビア半島、イギリス、スコットランドへ最初の旅行を行う。1841年以降はパリのアトリエで画業に従事しながら、世界各国（イタリア、スペイン、ポルトガル、エジプト、ブラジル、北アメリカなど）を旅行した。1862-64年の旅行では、西アジアからインド・中国を経て日本にも来ている。

Hsüeh, Karl シュー（ - ） No.23

【I】

Isabelo de los Reyes レイエス（ - ） No.18

【J】

Jacoby, Gustav ヤコービ (1857-1921) No.95

ドイツの銀行家、美術収集家。ベルリンの日本領事も勤める。ベルリン独日協会（和独会）会員で、1903年12月の同会の集会では日本の芸術について講演している（Haasch, Günter hrsg., “Die Deutsch-Japanischen Gesellschaften von 1888 bis 1996.” I -27, p.33）。

ところで『国華』という雑誌は、1889年（明治22）に高橋健三、岡倉天心等によって創刊され、世界で2番目に長寿の美術雑誌として現在も発行されているが、その182号に「刀剣の装具」という論文が載っている（1905年（明治38）7月、pp.22-25、マイクロフィルム版第8巻）。この論文の著者は無外子（瀧精一）である。その翌年、ヤコービは『Ost=Asien』のNo.95に「日本刀の金属装飾～『国華』No.182」という文章を書き、『国華』の歴史とこの無外子（瀧精一）の論文を紹介している（1906年（明治39）2月号、pp.459-461）。現在と違って交通も通信も大変不便な100年近く前、東京からベルリンに行くには汽船と汽車で約1ヶ月半から2ヶ月もの時間を必要とした。そのような時期における、このヤコービの論文の寄稿のスピードは、かなり速いものと言えよう。『国華』創刊後17年目に、その中の論文の一つが、『Ost=Asien』によってドイツ、そしてヨーロッパに紹介されたことになる。

Jenkins, Fred C. ジェンキンス（ - ） No.4

電気技術と機械製作を主業務とする会社の名前。ハンブルクのケーニヒ通り14番地にあった。

Jongh, Herman de ヨング（ - ） No.93

オランダのロッテルダムで勤務した日本領事。日露戦争終結の3ヶ月後に当たる1905年（明治38）12月号の『Ost=Asien』No.93（p.360, p.376）には、領事ヨングのもとに、日本人のための義

捐金として1,625DM.と、たくさんのチーズ、紙巻タバコ、葉巻タバコなどが届けられたことが記されている。

【K】

Kang-Yu-Wei 康有為 (1858-1927) No.10

中国、清朝末期民国初期の学者、政治家。欧米列強の中国侵略、日清戦争の敗北などによる民族的な危機感から愛国心を燃やし、仏教学、歴史学、西洋の学術などを広く学び、独自の儒教学説を模索するとともに、日本の明治維新を手本とする政治運動を展開した。1898年光緒帝は西太后を無視して康有為を登用し、彼の主張する諸改革（専制政治廃止・立憲君主制樹立、人材登用、教育改革、孔子教設立など）を進めようとしたが、西太后や保守派官僚、満州貴族などの大反対にあい、改革は挫折した。康は弟子の梁啓超とともに日本に亡命し、その後世界各地を遊歴したが、思想的、政治的には儒教中心の限界があり、結局保守派の代表的人物として終わった。

Ki-Siu () No.39

清朝末期の陸軍大臣。義和団事件(1899-1901)末期、義和団の一味として1901年2月8～10日頃に処刑された。

Kuang-Hsü 光緒帝 (1871-1908) No.125

中国、清朝末期第11代の皇帝。在位1874-1908年。母が西太后の妹であったことにより、西太后によって4歳で皇帝に擁立される。以来政権は西太后が握り、1887年皇帝親政になって以降もその状況は変わらず、生涯西太后の専横に苦しむ。1898年、日本の明治維新を範とする近代化を唱える康有為、梁啓超らの主張を受け入れ、戊戌変法を開始し実権の確立を計ったが、西太后一派の反撃を受け、失敗し幽閉される。1908年西太后の死の前日に死去。

【L】

Lagerström, Marie von ラーゲルシュトレーム (1823-) No.10,64

明治時代に日本人を多く下宿させたベルリンのパンジオーン（下宿屋）の女主人。開業は1854年と古く、場所はパッサウアー通り3番地にあった。これは、旧西ベルリンの繁華街タウエンツィエン通りにあるデパートKDBのすぐ西の通りである。彼女は官吏の未亡人で大の日本蟲眞であり、青木周蔵（外交官・政治家）を初めとして多くの日本人が世話になり、日本人は親しみを込めて彼女のことを「日本おばあさん」と呼んだ。80歳になる1903年にはパンジオーンの名前を、「パンジオーン・ニッポン・オバアサン」と改名した。巖谷小波は『洋行土産』上巻（I-31、この書籍については本稿p.52のグラマツキーの項参照）において、「有名の日本婆」（pp.359-361.）としてこの婦人のことを紹介している。次の頁の写真は、『Ost=Asien』No.128（1909年3月号）p.328に掲載されたものであり、前から2列目の左端の人物がラーゲルシュトレーム婦人である。これは86歳の時の写真となる。写真の説明に、日本人サークルの中では彼女は「Nippon-Basan」（日本婆さん）として有名であったと記されている。



Leroy-Beaulieu, Pierre Paul ルロア・ボーリュウ (1843-1916) No.33-35

フランスの経済学者、経済ジャーナリスト。1872年自由政治大学財政学担当教授。1873年に経済・金融週刊誌『エコノミスト・フランセ』を創刊。これはイギリスの『エコノミスト』に範をとったものであり、フランスの第三共和制の経済史研究のために貴重な資料となっている。1880年にコレージュ・ド・フランス政治経済学担当教授となる。自由主義経済学の立場から、保護貿易主義を厳しく論駁した。

Liang-Chi-Chao 梁啓超 (1873-1929) No.7-8

中国、清朝末期民国初期の啓蒙思想家、政治家、学者。1890年康有為の門に入り、漢学のみならず仏教学や欧米の近代思想にも接した。1898年、光緒帝の政治改革戊戌変法の開始とともに康有為のもとで働くが、西太后らのクーデターで挫折し、康とともに日本に亡命した。その後欧米での滞在などを経て、1920年政界から引退した。その間、政治思想は共和主義に近い民権思想から立憲君主主義、さらには開明的専制君主論へと後退していくが、清朝末期民国初期の激動期において各分野に鋭い問題提議を行い、また後進の啓蒙にも大きな役割を果たした。しかし、中国の近代化を阻んできた封建主義的勢力及び列強帝国主義勢力と真っ向から対決することはなかった。

Li Hung-Chang 李鴻章 (1823-1901) No.39

中国、清朝末期の政治家。1870年直隸総督兼北洋通商事務大臣となり、以後25年間その任にあって清朝の外交、軍事、経済の運営にあたった。その間洋務派（本稿p.48張之洞の項参照）の首領として西洋近代文化の摂取につとめ、洋式軍事工業、民間工業の創設を進めたが、内外の事情のために、明治維新政府の殖産工業政策ほどの成果はあげられなかった。日清戦争（1894-95）では

陸・海軍とも壊滅的打撃を受け、敗戦後講和会議の全権として下関条約を調印後、政界から一時退いた。しかし外交面での手腕を買われ、1896年にはロシア皇帝の戴冠式に派遣されて露清同盟密約を結び、1901年には義和団事件の事後処理担当の全権として辛丑条約（義和団議定書）に調印した。

Loew, Carl Benedikt Oscar ロイブ（レーヴ）(1844-1941) No. 7,11,17

ドイツの化学者、生理学者。バイロイト近郊のマルクトレドヴィッツに生まれ、ミュンヘン大学とライプツィヒ大学で化学と生理学を学ぶ。1867-76年の間はアメリカに行き、ニューヨーク私立専門学校の分析化学の助手を務める。1877年にライプツィヒ大学で学位を取得し、同年ミュンヘンの植物生理学研究所の助手となる。1893-1907年（明治26-40）の間は、1897-1900年（明治30-33）の在米期間を除き、東京大学で農芸化学のお雇い外国人教師を勤め、リービヒの流れをくむドイツ流の農芸化学を導入し、その基礎を築いた。帰国後1914年にミュンヘン大学教授、1926年ベルリン大学に移り、1941年ベルリンで死去。

【M】

Ma-do-Yun () No.110,117

中国人。法学博士。

Magnusson, Alexander マグヌッソン () No.22-23,28-29

Mano, S. () No.110-113

Meckel, Klemens Wilhelm Jakob メッケル (1842-1906) No.100,103

プロイセン、ドイツ帝国の軍人。プロイセンの陸軍大学を出て参謀将校となる。参謀本部付陸軍少佐の時に日本に招かれ、1885-1888年（明治18-21）の3年間、陸軍大学校お雇い外国人教師としてドイツ式の戦略戦術を教える。長岡外史、藤井茂太などの参謀将校を養成するとともに、参謀次長川上操六、陸軍大学長児玉源太郎などが進めていた軍備の近代化を援助した。これにより日本陸軍の兵制は、フランス式からドイツ式に改革されていった。

Mertig, Alfred メルティヒ () No.101,104,116,117,120-122

M, G. () No.61

Müller, Friedrich Max ミュラー (1823-1900) No.33

ドイツのデッサウに生まれ、イギリスに帰化した東洋学者。近代言語学・宗教学の創始者。ライプツィヒ大学でサンスクリット語を学び、パリではビュルヌフのもとで『リグヴェーダ』の研究を行う。1847年イギリスに渡り、1850年以降オックスフォード大学助教授、やがて教授となる。言語学の分野では、インド語系とヨーロッパ語系が同祖であることを論証した。また比較言語学の方法を範として宗教研究にも向かい、1870年の講演において初めて「宗教学」の名称を用い、キリスト教を絶対視する当時の風潮の中で、あらゆる宗教を価値判断抜きに客観的科学的に研究すべきことを主張した。『リグヴェーダ』の校訂6巻（1849-75）、『東方聖書』（東方諸宗教の聖典の英訳）51巻（1879-1904）などがある。シューベルト作曲の『美しき水車屋の娘』『冬の旅』の詩

を書いたミュラー (Müller, Wilhelm 1794-1827) は父。1900年オックスフォードで死去。

Müller, Friedrich Wilhelm Karl ミュラー (1863-1930) No.18, 25

ドイツの東洋学者。ベルリン民族博物館の助手 (1887)、副館長 (1896) を経て館長 (1906) となる。マニ教聖典の考証やウイグル語の研究で著名であり、またトカラ語の研究においてもその解説の基礎を築いた。これらの諸研究により、中央アジア及び西南アジア史の研究に寄与した。日本の能面にも造詣が深い。1930年ベルリンで死去。

Münsterberg, Oscar ミュンスターベルク (1865-1920) No.53

ドイツの美術史家、企業家。ダンツィヒ (現ポーランドのグダンスク) に生まれ、ミュンヘン大学とフライブルク大学で経済学と美術史を学び、論文「1542-1854年の間の日本の貴金属貿易」により学位を得る。1906年ベルリンの『ドイツ国民新聞』の理事となり、1909年にはライプツィヒで出版社の経営幹部となった。1912年にはベルリンに戻り、ハーゲルベルク, W. 株式会社の理事となる。その間仕事の関連で東アジアに多くの旅行を行い、それをもとに美術史の研究も続けた。『日本美術史』(1904-07, 3巻)、『中国美術史』(1910-12, 2巻) などの著作がある。1920年ベルリンで死去。

【N】

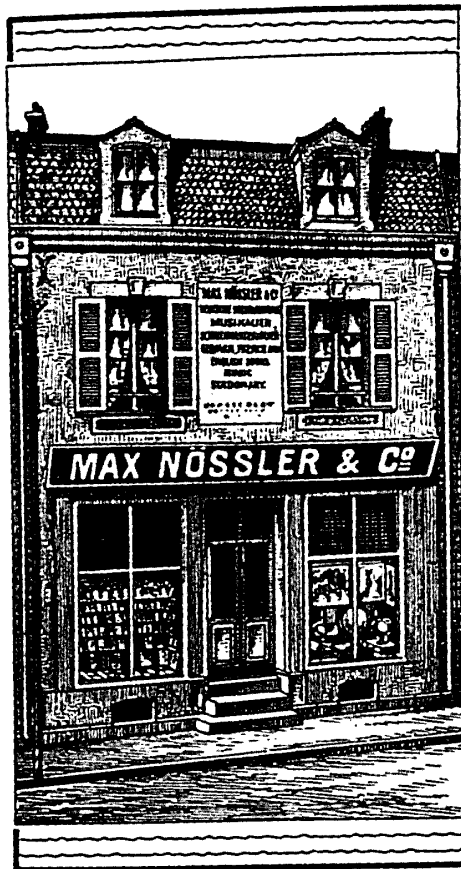
Nachod, Oskar ナホッド (1858-1933) No.58, 59, 69

ドイツの日本学者。ライプツィヒで生まれ、同地の商業学校に学び、父の設立した繊維会社に入社。仕事の関係で欧米各地を旅行した後、1894年に実業界を引退し歴史の研究を始める。1897年に「17世紀オランダ東インド会社と日本の関係」で学位を取得。『日本史』(1906-1930)、『日本文献』(1928) を出版。ベルリン独日協会 (和独会) の会員。歴史学者リース Riess, L. と辻高平が中心になって創刊された同協会の機関誌 “Mitteilungen der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wadoku-Kai)” (I -24, 25) に、彼はほとんど毎号のように日本の文献目録を掲載している。これは当時のドイツにおける日本研究の水準を知る上で貴重な資料と言える。1926年には日本を訪れ講演をした。1933年ドレスデンで死去。[参考文献] ナホッド, O. 『十七世紀日蘭交渉史』(富永牧太郎訳、春徳社、1956)

Nössler, R. Max ネスラー (1860-) No.80

書籍を中心に扱うドイツの貿易商人。ベルリン独日協会 (和独会) 会員。ライプツィヒで書籍出版業を学び、1897年と1902年には書籍出版業者としてエジプト、セイロン、中国、日本、アメリカなどを訪れる。後に上海と横浜で、書籍を中心に扱うマックス・ネスラー商会を開く。次の頁の広告は『Ost=Asien』No.85 (1905





Buchhandlung von Max Nössler & Co. Yokohama, Mainstr. 80.

Gut ausgewähltes Lager aus
allen Zweigen der Litteratur.

Regelmässiger Eingang von Büchersendungen aus
Deutschland, Frankreich, England und Amerika.

Tauchnitz - Edition • Engelhorn's Romanbibliothek •
Kürschners Bücherschatz • Kleine Bibliothek Langen •
Sammlung Götschen • Englische, französische, russische
und italienische neuere Romane • Andrees-Handatlas •
Landkarten • Globen • Meyers und Brockhaus' Kon-
versations-Lexikon • Reise-Werke • Sprachführer •
Musikalien.

Prompte und schnellste Expedition sämtlicher
Journale und Zeitungen des In- und Auslandes.

Bücherverzeichnisse sowie Spezial-Kataloge kostenfrei.

年(明治38)4月号)p.37に掲載された同商会のものである。また前頁の写真は『Ost=Asien』No.80(1904年11月号)p.329に掲載されたものであり、この記事には、ブレーメンで日本領事を務めていた彼が、日露戦争の折ロシアからドイツに逃れてきた827人の日本の哀れな民間人を、「まるで父が子供を気遣うように」(p.329)世話をしたことが記されている。

【P】

Prost, Emil プロースト (-1912) No.29

ドイツの裁判官。ベルリン東洋語学校で学び、ベルリン独日協会(和独会)の主要メンバーの一人であった。ベルリン、そして後にヴィシュヴィル(東プロイセン)の区裁判所判事を務めた後、1901年からはラティボールの、そして最後は現ポーランドのシュテッティン地方裁判所判事となり、当地で死去。1900年には東アジアへの大旅行を行い、日本、朝鮮も訪れている。本稿p.46の写真の後列左から3人目の人物。

【R】

Rein, Johannes Justus ライン (1835-1918) No.83

ドイツの地理学者。マインツ近郊のラウンハイムに生まれ、当初数学と自然科学を学び実業学校で教師を務めていたが、研究旅行でヨーロッパ各地、北アメリカ、北アフリカを訪れる。プロイセン商務省の嘱託で、日本の商工業調査のために1873-1875年(明治6-8)の間滞在し、日本各地の地理・産業などを調査した。帰国後1876年マールブルク大学教授、1880年ボン大学教授と

なり、『日本』2巻(1881-1886)を著す。これは、当時日本に関する最も正確、かつ詳細な情報を伝える書物として知られた。1918年ボンで死去。右の写真は、『Ost=Asien』No.83(1905年(明治38)2月号)p.454に掲載されたものである。なお武内博編著『来日西洋人名事典』(I-17)ではラインの生年が1843年になっているが、ここではDeutsche Biographische Enzyklopädie, Bd.8,p.213(I-3)に従って1835年とした。



Richter, Walter リヒター () No.10,15,17,21-22

Ro-Hyakuju 盧百寿 () No.69

日本の外交官。東京の独逸学協会学校卒業。1897年(明治30)秋から1903年(明治36)秋まで、ベルリンの日本公使館で事務長を務める。1898年冬学期-1899年夏学期の期間、ベルリン大学の聴講生でもあった。本稿p.46の写真の後列右端に写っている人物。『Ost=Asien』No.69(1903年12月号)p.408の記事「公使館事務長 盧百寿」によれば、彼が離任の折、1903年11月9日にはベルリンの「日本クラブ」で賑やかな送別会が開かれた。そして3日後の11月12日に彼はアントワープから汽船阿波丸に乗船し、ちょうど2ヶ月かかって1904年1月12日に横浜港に着いている。因みに滝廉太郎は(本稿pp.34-35参照)、1902年8月24日にアントワープから汽船若狭丸に乗船し、10月17日に横浜港に着いた。当時のヨーロッパ-日本間は、汽船・汽車を乗り継いで約1ヶ月半から2ヶ月もかかる長旅であった。

Romanowski, Eduard ロマノフスキー () No.118

Rothbarth, Walter ロートバルト (1886-1931) No.86,89,103-104,108,111,117,120-121,126, (135: 日本でのシェークスピア)

ドイツの文筆家、新聞編集者。北ドイツのロストクに生まれ、デンマーク国境沿いのフレンスブルク、ダンツィヒ(現ポーランドのグダンスク)などで暮らし、それぞれの地で『ロストク・アンツァイガー』『フレンスブルク・北ドイツ新聞』『ダンツィヒ一般新聞』の編集者を務める。

【S】

Schlegel, Gustav スフレーヘル(シュレーゲル)(1840-1903) No.69

オランダの中国学者。中国語通訳官補として廈門・広東の領事館に(1858-62)、また通訳官としてバダヴィアの領事館に(1862-72)勤務したが、病気のために退官帰国(1872)。その後ライデン大学で中国語学と中国文学講座の初代教授(1877)となり、コルディエ,H.とともに中国研究を主とする雑誌『T'oung Pao(通報)』を創刊し(1890)、自らも多くの論文を掲載した。同誌に連載した『地理学の諸問題』(1892-95)、『地理考』(1898-99)などが知られており、また蘭華辞典や中国文学の翻訳などもある。

Schwarzenstein, Mumm von シュヴァルツェンシュタイン () No.127

ドイツの外交官。1906-1911年（明治39年5月-44年3月）駐日ドイツ大使。

Scriba, Julius Carl スクリバ（1848-1905）No.45

ドイツ人医学者。マンハイム近郊のヴァインハイムに生まれ、ハイデルベルク大学で学び、1874年に学位取得。学生時代には普仏戦争に従軍し、傷病兵の手当に従事した。その後ベルリン、フライブルクの各大学で外科医学を学ぶ。1881年（明治14）にシュルツェ, W.（本稿pp.53-54のハインリヒ公子の項参照）の後任として東京大学のお雇い外国人教師となり、以後20年間にわたって在任した。ベルツ, E.O.E.vonの内科に対して外科を担当し、帝国大学の双壁とされる。1901年（明治34）9月に東京大学を退官後、築地の聖路加病院の外科主任となったが、病気のため転地療養先の鎌倉で死去。日本人の妻神谷ヤスとの間に三男がある。下の写真は、『Ost=Asien』No.45（1901年（明治34）12月号）p.391に掲載されたものであり、前から2列目の左から3人目の人物がスクリバである。石橋長英・小川鼎三『お雇い外国人：9 医学』（鹿島出版会、1969）には、彼は20年間にわたる東京大学勤務を1901年9月退き、それからは聖路加病院の外科主任として働いたとあるが（p.144）、この写真は1901年11月9日にベルリンで、かつての東京大学での教え子たちとともに撮影したものである、スクリバは東大退官後一度帰国していたことがわかる。

Herr Professor Dr. J. Scriba in Berlin.

(9. November 1901.)



Sawada, Ishihara, Iwasaki, Watsuji, Totsuka, Kimura, Ito.
Ikehara, Watanabe, Akutsu, Honda, Miyamoto, Kashiwamura, Inouye, Hirai.
Saito, Hasegawa, Scriba, Giotoku, Takaki.
Nagano, Hashimoto, Otori, Murayama.

Senzig, Hans ゼンツイヒ () No.110,114

Seymour, Sir Edward Hobart シーモア (1840-1929) No.30

イギリス海軍の軍人。義和団事件 (1899-1901) におけるシーモア救援隊の指揮者。1900年6月に北京の外国公使館地域が義和団によって包囲された折、イギリス中国派遣艦隊司令長官であったシーモア中將が、1500人の救援隊を率いて天津から北京に向かったが、多数の義和団民に阻止され引き返した。1901年大將となり、1910年退役。

Shakespeare, William シェークスピア (1564-1616) No.62, 135

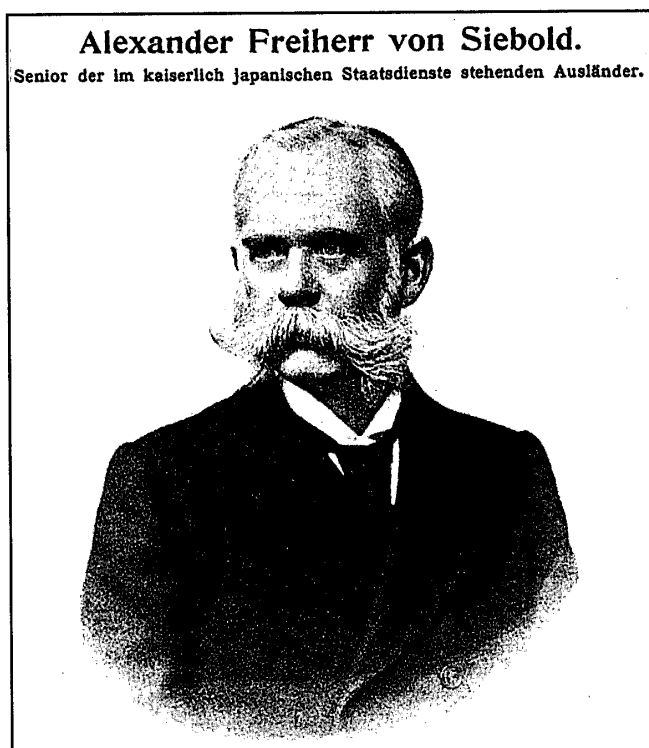
イギリスの劇作家、詩人。作品に『真夏の夜の夢』『ヴェニスの商人』『ハムレット』『オセロー』『マクベス』『リア王』『冬の夜話』など。日本でのシェークスピアの受容を振り返ってみると、すでに1877年(明治10)には『ヴェニスの商人』が『胸肉の奇訟』と題して翻案され、『民間雑誌』に掲載されている。1884年(明治17)には坪内逍遙が『ジュリアス・シーザー』を『自由太刀余波鋭鋒』と題して翻訳している。また1885年5月に大阪戎座で、宇田川文海による『ヴェニスの商人』の翻案『何桜彼桜銭世中』が中村宗十郎一座によって上演されたのが、シェークスピア劇の日本での上演の嚆矢とされている。その後川上音二郎一座や歌舞伎俳優による翻案形式の上演が続くが、1906年(明治39)に坪内逍遙が文芸協会を設立することによって、逍遙訳の記念すべき上演がしばしば行われるようになった。

『Ost=Asien』No.135 (1909年(明治42)10月号)掲載のエッセイ「日本でのシェークスピア」は、まさにそのような時期に書かれたものである。確かに上述したような日本でのシェークスピアの受容が、当時すべてヨーロッパに知られていたわけではない。否むしろ、このエッセイが掲載された1906年と言えば日露戦争終結の翌年であり、ヨーロッパにおける日本の知識は、一般にはまだまだ非常に限られていた時期であったと言える。実際このエッセイの中で言及されている日本でのシェークスピアの上演とは、『Ost=Asien』No.62 (1903年(明治36)5月号)掲載のグラマツキー(本稿pp.51-53参照)著「鹿児島でのシェークスピア」における『オセロー』と、1908年(明治41)の『ハムレット』のみである(上演場所・翻訳者・配役などは不詳。坪内逍遙訳は1909年なので、これは翻案ものか)。しかしいずれにせよ、当時の日本におけるシェークスピア受容の一端が、『Ost=Asien』という雑誌を通じてドイツ語圏を中心とするヨーロッパに紹介されたことは事実である。因みに『Ost=Asien』の目次にはこのNo.135のエッセイの著者は記されていないが、これを書いたのはロートバルト, W. (本稿p.60参照)である。

Siebold, Alexander Georg Gustav von シーボルト (1846-1911) No. 7 -12,14-16,18-20,25,35, (37: いったい黄禍などというものはどこにあるのか?), 38-45,48-51,53,56-58,60-67,69-71,74-78,80-83,92-94,96,100,114,116,121,133

日本の外交官として活躍したドイツ人。シーボルト, P.F.B.vonの長男。1859年、12歳の時に父とともに来日して以降、主に日本の外交顧問として明治以降の日本の発展に尽力し、日欧親善に貢献した。1887年にヨーロッパに戻り、1890年代の終わりにはベルリンに滞在した。玉井喜作の創

刊した『Ost=Asien』に多くの論文を寄稿し、その中のいくつかはまとめて『ヨーロッパ国際法への日本の参入』（ベルリン:1900）や『ジーボルト最後の日本旅行』（ベルリン:1903, I-39）として玉井喜作により出版されている。なお『Ost=Asien』No.83,116へは、筆名「鳴滝」で寄稿している。また目次には筆者名が記入されていないが、No.37の黄禍論も「鳴滝」で寄稿している。この長男シーボルトと玉井喜作の関係に関しては、他日稿を改めて論じていくことにしたい。下の左の写真は、『Ost=Asien』No.58（1903年1月号）の表紙裏に掲載されたものであり、1859年に長崎で父と写したものである。また下の右の写真は、『Ost=Asien』No.12（1898年12月号）p.537に掲載されたものである。



Siebold, Philipp Franz Barthasar von シーボルト（1796-1866）No.5,60-62,65,70

ドイツ人医師、博物学者。ヴュルツブルク大学で医学、生物学、民族学、地理学などを学び、ヴュルツブルク近郊のハイディングスフェルトで医師として開業するが、日本に関心を懷き、オランダ東インド会社の日本商館付医官として1823年（文政6）に来日。高野長英、伊藤玄朴他多くの蘭学者を育てたが、いわゆる1828年（文政11）のシーボルト事件により1829年に帰国。その後は、日本研究の成果を大著『日本』20分冊（1832-1851）、『日本動物誌』5巻（1833-50）などとして刊行した。日蘭通商条約締結（1858）後の1859年（安政6）に長男アレクサンダーを伴って再び来日し、1862年（文久2）まで滞在した。医学の面のみならず、植物学や動物学など多方面に渡る日本研究に多くの貢献をなし、また、ヨーロッパに日本及び日本の動植物を本格的に紹介した。長男アレキサンダー・シーボルト、次男ハインリヒ・シーボルトも来日し、長男は日本の外交官として明治時代の近代化に貢献し、弟は日本の考古学と民族学の分野に大きな足跡を残し

た (I-38参照)。右の写 真は、
『Ost=Asien』 No. 5 (1898年 8 月 号)
p.197に掲載されたものである。また次
の頁の写真は、『Ost=Asien』No.62 (1903
年 5 月 号) p.51に掲載されたものであ
り、中央の父シーボルトの胸像に向
かって左隣が長男アレキサンダー、右
隣が次男ハインリヒである。[参考文
献] ケルナー ,H.『シーボルト父子伝』
竹内精一訳 (I-36)、ヨーゼフ・クラ
イナー「三人のシーボルト」ヨーゼフ・
クライナー編著『黄昏のトクガワ・ジャ
パン〜シーボルト父子の見た日本』(I
-37) pp.10-41。明治以降の文献に関し
ては竹内博編著『来日西洋人名事典』
(I-17) の項目「シーボルト」 pp.181
-188に詳しい。



S.M. () No.103

Spiro, Georg スピーロ () No.21

ドイツの眼科医、医学博士。ベルリン独日協会 (和独会) 会員。

Stern, Albert シュテルン () No.92,114

ドイツの文筆家、新聞編集者。ライプツィヒ大学とブレスラウ大学で哲学、文学、ゲルマニス
ティック、ロマンス諸語などを学び1884年に学位取得。1885年からベルリンでジャーナリストとし
て活躍し、『ローカルプラウデライ』誌の文芸欄で書評や演劇批評を行う。1898-1902年には『ド
イツ婦人のための日曜新聞』編集者を勤める。同じジャーナリスト仲間ということもあったのか、
玉井喜作の家族とは特に親しかったようで、玉井の次女韶子が1905年10月17日に17歳で病没した
時に、『Ost=Asien』の翌月号に心のこもった美しい弔辞を書いている。その中に次のような一節
がある。()内は筆者挿入。「私がこの姉妹 (玉井喜作の次女韶子と三女文子) と知り合いになっ
たのは、つい3年前のことであった。……それから時折 (この姉妹は) 私の家にも来ることが
あったが、特にやっと12歳になったばかりの韶子は、若いけれども私の妻の心からの友人になっ
たし、また私の幼い娘の大切な遊び友達になった。……私たちが郊外に引っ越してから、韶子
はしばしば家を訪ねてくれた。そして私たちは、遠い所から私たちの所に移植された蕾のような、
このやさしく思いやりのある少女が日増しに成長していく様子を、心から喜んで見守っていた。
その蕾はドイツの太陽のもとではますますドイツ風に育っていき、そしてついに美しい花となっ

て開花したのであった。……安らかに眠れ、ドイツの地に」(『Ost=Asien』No.92, 1905年11月号, p.312-313)



Stessel', Anatolii Mikhailovich ステッセル (ステッセリ) (1848-1915) No.83-84

ロシアの将軍。1866年パーヴェル陸軍学校を卒業、露土戦争(1877-78)に従軍。1899年から東シベリア第3歩兵旅団を指揮し、1900-1901年には義和団事件の制圧にも加わる。1903年8月より旅順司令官となり、日露戦争(1904-1905)時には旅順防衛の指揮をとったが、1905年1月に旅順要塞は陥落した。軍法会議において、防衛能力があるにもかかわらず降伏したとして死刑を宣告されるが、後に減刑され、さらに1909年ニコライ2世により特赦を受ける。

Stockheim, Heinrich シュトックハイム () No.35

Sun-Paoki 孫寶琦 (1867-1931) No.121

中国の外交官、政治家。浙江省の杭州に生まれ、法曹界の仕事に従事した後、ウィーン、ベルリン、パリの中国公使館に勤務。その後フランス公使 (1902-06)、ドイツ公使 (1907-08)、山東省総督 (1909-11)、外務大臣 (1913-14)、大蔵大臣 (1916)、首相 (1923) などを歴任し、1931年上海で死去。右の写真は、『Ost=Asien』No.121 (1908年7月号) p. 7 に掲載されたものである。



Sussmann, A. ススマン (-) No.88

ドイツの商人。商業顧問官 (1919年まで商工業功労者に与えられた称号)。ベルリン独日協会 (和独会) 会員。

【T】

Taft, William Howard タフト (1857-1930) No.125

アメリカ合衆国第27代大統領 (在職1909-13)。1878年イエール大学卒業後、1880年シンシナティ法律学校卒業。1901-04年の間は、フィリピン初代総督として内乱の收拾と農地改革などを行う。1909年ローズベルト,T.の後継者として大統領に就任。外交面においては、中南米と東アジアにおいて海外投資を促進させることにより海外市場を広げ、アメリカの政治的経済的影響力の増大を図ろうとするいわゆるドル外交を推進した。その後イエール大学教授 (1913-21)、第9代最高裁首席判事 (1921-30) を勤める。

Tao-Ping (-) No.110

Tao-Tchun (-) No.120

Traulsen, Heinrich トラウルゼン (1843-1914) No.114

北ドイツのアンゲルン地方 (デンマーク国境沿いの町フレンスブルク近郊) のドルロットホルツに農夫の子として生まれる。農夫、居酒屋、煉瓦作り職人など種々の職業を転々とした後、1881年にフレンスブルクに移り、やがて同地の住宅組合の管理人となる。低地ドイツ語で童話や詩を書いた。

Tschechow, Anton チェーコウ (-) No.77

Tse-hsi (-) No.125

清末第11代皇帝光緒帝 (在位1875-1908) の母 (西太后の妹)。

【U】

Uchtomsky, Esper Esperowitsch ウフトムスキー (1861-) No.42

ロシアの官僚、文筆家、新聞編集者。また東清鉄道総裁、ロシア中国銀行頭取でもあった。侯爵。ペテルブルグ近郊のオラーニエンバウムに生まれ、ペテルブルグ大学で哲学と文学を学び、1884年内務省に就職する。1896年以降は新聞Sanktpeterburgskija Wedomosti誌の編集者となり、ここでロシアの対東アジア政策に深い関心を懐く。ロシア皇太子ニコライ2世が1891年（明治24）に来日した折には、随行員を務める。

Ulm zu Erbach, Helene Freiin von ウルム・ツー・エルバッハ（1848-1927）No.34,51,105,108

大シーボルト（Siebold, P.F.B. von、本稿のpp.63-64参照）の長女。シーボルトの遺品の内、この長女によって受け継がれたものは、現在ドイツのヘッセン州フルダ近郊のシュルヒテルン郊外にあるブランデンシュタイン城に残されているようであり、長崎市教育委員会が1990年10月に同城の調査を行い、シーボルト関係の文書類をマイクロフィルムに収めた。近年中には目録が作成され、マイクロフィルムも一般に公開されるということである。詳細は宮坂正英「古城に眠るシーボルト文書～フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家文庫の成立と特色」ヨーゼフ・クライナー編著『黄昏のトクガワ・ジャパン～シーボルト父子の見た日本』（I-37）pp.129-146参照。

【V】

Venn, Heinrich フェン（1865- ）No.61

ドイツの医者、医学博士。児童保養所施設（特に結核患者対象）の創設者。ベルリン独日協会（和独会）の会員で、日本美術の収集もしており、1903年にベルリンで開催された同協会企画の日本美術展には、毘沙門天と不動明王の2体の仏像を提供した（『Ost=Asien』No.60, p.542. 「ベルリン「和独会」の日本美術展；判事補パウル・ブルン博士」）。また獨逸学協会学校第4代校長を務めた大村仁太郎と交友があり、大村がベルリン留学中（1901-1903、明治34-36）に獨逸学協会学校が消失（1901年12月5日）した際には、資金援助のためにベルリン独日協会（和独会）主催で「東京祭」が開催された（1902年4月3日：ベルリン・フィルハーモニーの集会場）。この催しにおける収益3,000DM.（現在の50,000DM以上、約300万円余りに相当）は、獨逸学協会学校の図書館に新しく蔵書を購入するための資金として寄付された。フェン, H.はこの「東京祭」の折、個人的に1,000DM.以上を寄付し、後に婦人名義で別に3,000DM.を寄付している。

この「東京祭」で、ベルリン留学中の幸田幸が箏曲を弾いたことが、その報告に記されているが（「1902年4月3日ベルリンでの“和独会”の東京祭」『Ost=Asien』No.50

Doitsugaku Kiokaigakkō nach dem Brande.



(1902年5月号) p.56)、そこには曲名までは書かれていない。ところが、その時に同席した巖谷小波がそれを記録しており、曲名は「吾妻獅子」であったこと、そしてその楽器等は、「わざわざライブツィヒの博物館から、特に借り入れたもの」であったことがわかる(巖谷小波『洋行土産』(I-31) 上p.291)。

前頁の写真は、獨逸学協会学校の消失を伝える写真である(『Ost=Asien』No.49, p.10)。また下の写真は「東京祭」の折のものである(『Ost=Asien』No.50, p.55)。最後列の右から2人目がフェ



ン,H、最後列左端がブルン,P、最前列右から2人目は芳賀矢一(国文学者・東大教授)、四人目は玉井喜作(『Ost=Asien』主筆)、前から2列目の和服姿が巖谷小波、その左が大村仁太郎。さらに次の頁の写真は、大村仁太郎が帰国する時にフェン,Hの自宅で開かれた送別会(1903年2月10日)の折のものである(『Ost=Asien』No.61,p.5)。この写真には名前が明記されていないが、最前列右から二人目がフェン,Hと思われる。その左隣が玉井喜作、大村仁太郎は最後列の中央(シャンドリアの下)に写っている。

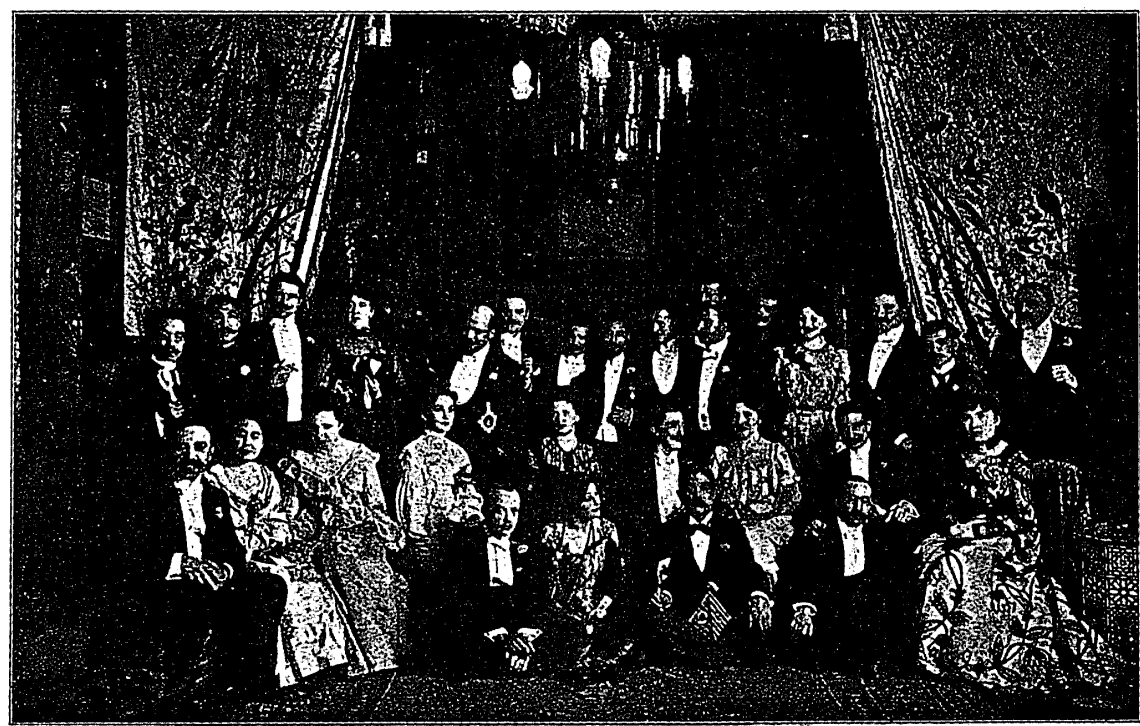
「東京祭」の経緯に関する詳細については、『Ost=Asien』No.50(1902年5月号)の「1902年4月3日ベルリンでの“和独会”の東京祭」「東京祭における大村仁太郎教授の挨拶」、及び『Ost=Asien』No.51(1902年6月号)の「心よりのお願い」に詳しい。なお1902年11月29日に獨

逸学協会学校が再建された時には、フェン,H.は「日独永遠の友情が獨逸学協会学校を通じて実ることを祈念した大理石の壁面を寄贈」している（七十五年史編集委員会編『独協学園七十五年史』（I-60）p.147、獨協学園百年史編纂委員会編『目で見える獨協百年』（I-61）p.110）。

Virchow, Rudolf Ludwig Carl フィルヒョー（ウイルヒョー）（1821-1902）No.42

ドイツの病理学者、公衆衛生学者、人類学者、政治家。現ポーランド領の東ポンメルンで生まれ、ベルリン陸軍軍医学校で医学を学ぶ。1849-56年ヴュルツブルク大学教授、1856年ベルリン大学病理解剖学教授及び病理研究所長となる。1858年に『細胞病理学』を著す。細胞が生命の基本

Abschiedsfeier zu Ehren des Prof. Jintarō Omura bei Dr. med. H. Venn, Berlin, Nollendorfplatz 1.
(Am 10. Februar 1903.)



単位であることを明らかにし、すべての病理現象は細胞の変化に帰着すると主張し、細胞病理学の分野で大きな功績を残す。また人類学的研究にも着手し、ドイツ人類学会を設立した。さらに政治の分野にも関与し、1859年以降ベルリン参事会員を勤め、1861年以降プロイセン下院議員として進歩党を結成して議長を勤めた。

【W】

Waldersee, Adfred Graf von ヴァルダーゼー（1832-1904）No.40

プロイセン、ドイツ帝国の軍人。ポツダムに生まれ普墺戦争（1866）、普仏戦争（1870-71）に従軍し、1891年第9師団長となる。1900年の義和団事件の折には、元帥としてヨーロッパ軍を統帥した。1901年に帰国し、ハノーヴァーで死去。没後『回想録』（1922-23）、『往復書簡:1886-1891』（1928）が出版された。

Weyl, Maximilian ヴァイル（ - ）No.105-109,111-112,114-115

技術部長。ベルリン独日協会（和独会）会員。

Wilhelm II ヴィルヘルム 2 世 (1859-1941) No.30, (115: ドイツ帝室の生活) ,127,138

ドイツ皇帝及びプロイセン王。在位1888-1918年（明治21-大正7）。1877-79年ボン大学で法学、政治学などを学び29歳で即位。生来冷静な分別を欠き衝動的な性格の持ち主でもあったが、即位2年後にビスマルクを退け親政を開始後、積極的な対外膨張政策、いわゆる「世界政策」をとるようになった。すなわち、資本主義の後進国ドイツが、イギリス、フランスなど先進諸国の勢力範囲に割り込んでいくために、英独建艦競争を行い、近東への進出（三B政策）ではロシアやイギリスとの対立を招いた。またモロッコ問題ではフランスと衝突し、アジアにおいては膠州湾を占領し山東省をドイツの勢力に組み入れるなど、武力を背景に露骨な侵略政策をとることになった。これらが第一次世界大戦を引き起こす重要な要因となる。戦争末期のドイツ革命の勃発によりオランダに逃れ、帝位を辞す。以後そこで余生を送り、1941年に死去。上の写真は、『Ost=Asien』No.138（1910年1月号）p.227に掲載されたものである。



Kaiser Wilhelm II.

Wortmann, Heinrich ヴォルトマン () No.48

【Y】

Yuan-Chi-Kai 袁世凱 (1859-1916) No.30

中国の軍人政治家。清朝末期から民国初期にかけての軍閥の首領。朝鮮で甲申事変（1884）を鎮圧して李鴻章に認められ、日清戦争（1894-95）後は北洋新軍の育成に努めた。戊戌の政変（1898）では維新派を裏切って西太后に味方し、康有為らを失脚させ、義和団事件（1899-1901）においては列強の利益を最優先して帝国主義者の信用を得た。1911年辛亥革命が起こると巧みな策略によって革命軍と妥協し、清帝を退位させ、1913年自ら中華民国の大統領に就任した。国内の封建勢力と帝国主義列強の支持を背景に軍閥政治を行い、孫文を中心とする国民党などの革命派を鎮圧し帝政復活を目論むが失敗した。

【正誤表】

昨年度の拙稿、『『Ost=Asien』研究－その1．全目次－』（和歌山大学教育学部紀要 人文科学、第52集2002年）における訂正は以下の通りである。

場 所	誤	正
p.107下から7行目	-1896	-1866
p.120下から15行目	ミューラー	ミュラー
p.124下から5行目	ミューラー	ミュラー
p.129下から9行目	ミューラー	ミュラー
p.132下から13行目	サッポロー	札幌：
p.135下から12行目	ウチトムスキー	ウフトムスキー
p.136下から1行目	医者	医学者
p.137下から12行目	スクリーバ	スクリバ
p.143上から12行目	ミュンステルブルク	ミュンスターベルク
p.145上から1行目	医者	医学者
p.146上から5行目	ナッホド	ナホッド
p.146下から5行目	ナッホド	ナホッド
p.153上から2行目	ナッホド	ナホッド
p.153上から8行目	芦	盧
p.178上から7行目	神仏	仏
p.190上から10行目	全権大使スン・パオキ	全権公使孫寶琦